謡曲『井筒』の本説考

金　忠　永

一、はじめに

謡曲『井筒』は、『檜垣』とともに世阿弥作であることが確実とみられる作品の一つである。この自作を世阿弥は、『申楽談儀』において、

井筒・道盛など、直成能也。（中略）井筒、上花也。松風村雨、寵深花風の位歟。蟻通、閑花風斗歟。道盛・忠度・よし常、三番、修羅がかりにはよき能也。此うち、忠度上花歟[1]

と、評価している。つまり、「井筒、上花也」と、能作品の位を定めた九位のうちの「上三花」の位を『井筒』に配当した評価をくだしているのである。世阿弥能楽論書の『九位』によれば、この「上三花」には「妙花風」「寵深花風」「閑花風」等があるが、「井筒、上花也」の後文に「松風村雨、寵深花風の位歟。蟻通、閑花風斗歟」と、「上三花[2]」の第二・第三の位が続けられてきていることから、『井筒』の「上花也」を最高の「妙花風」と解釈し得るようである。世阿弥がこの自作を「妙花風」と思っていたかどうかはともかく、『井筒』が自信作であったことには間違いなかろう。「井筒、上花也」は、最高の自賛と見てよいのである。

しかし、一曲のどのような出来映えをこれ程自賛して満足していたのかは、この「上花也」だけでは推定するすべがなく、この一言だけをもって謡曲『井筒』の全般の作柄を評価する物差しとすることは不可能に近いと言える。

今日の『井筒』の能柄は、清澄な純愛物として高く評価されている。これは様々な要素に支えられた評価であろうが、その要素の一つとして考えられることに、世阿弥のこの「上花也」といった最高の自賛にもとづくことも否めないと思う。或いは一曲のモチーフと言える「筒井筒」の幼な恋が、今日に至るまでの享受者達の心の中に呼び起こす懐かしい憧れと

いった、心理的な志向性に起因する評価とも言えよう。

ここで仮に謡曲『井筒』の詞章の出来映えという一面を考えて見るとしたら、世阿弥も『申楽談儀』において、

書きて行くに、言葉に花を咲かせんと思ふ心に繋縛せられて、句長に成也。さやうの心を思ひ切りて書くべし。[3]

と述べた通り、切り詰めた簡潔な文体に綴られていることが指摘できる。なおかつ、同じく『申楽談儀』に、

たゞ、言葉の匂ひを知るべし。文章の法は、言葉をつゞめて理のあらはるゝを本とす。[4]

と、言葉の余韻を大切にし、簡潔な文言や明確な意味を能作の根本としていた世阿弥の考え方は、そのままこの『井筒』の簡潔な文体の中に盛り込まれたものと見てよかろう。が、世阿弥の「上花」は、こういった簡潔さに限る自賛ではあるまいから、こうした文体の側面だけで世阿弥の「上花也」を理解することには無理があろう。

以上のように世阿弥は、多くの疑問を抱かせる最高の賛辞を残したわけであるが、このことは言い換えれば、清澄な純愛に主題性を求めようとする今日の享受者達の『井筒』観にも疑問を抱いてよいのではないか、という問題をわれわれに提示しているとは言えないだろうか。

ともあれ、このような高い評価によって、『井筒』人気は支えられて来たと思われるが、西村聡氏が、「享受者としての私たちが築いてきた『井筒』の美的世界に、この能が創作された当時の享受のあり方と異なる要素の混在することが、すでに二つの方向から確認されている」[5]と指摘するように、伊藤正義氏[6]や中村格氏[7]らによって、清澄な純愛といった主題性を支える井筒の女の人物像をめぐり、その至純なイメージといったものが揺るがされているのである。西村氏のいう「二つの方向」というのは、一つには、「『伊勢物語』古注の類には、私たちとしては『井筒』の女主人公のモデルであってほしくない段のヒロインにまで有常娘の名をあてて解釈したものがある」ということで、このことは伊藤氏や香西精氏[8]らによって指摘されたことである。いま一つは、室町末期の面付・型付・装束付に、「〈小面〉〈若女〉といった若い美女の面を着用する現行の演出と違って、当時は前シテに四十女の〈深井〉、後シテに狂相の〈十寸髪〉を用いることが一般的であった」ことで、これは中村氏によって指摘されたものである。

本稿においても、このような伊藤氏や中村氏らの指摘に導かれつつ、世阿弥の「上花」への志向性が、単に「井筒の女」の美化した至純な恋心だけを描くことのみではなく、中世の伊勢物語注釈世界と交渉をもつ、より膨らみのある方向へ向

かっていたのではないかということについて考えてみたい。ここで「より膨らみのある方向」というのは、結論的に言えば、作者の世阿弥は、『伊勢物語』の中世の注釈世界にみられる新たな物語化というところに謡曲『井筒』の本説を求めて、その物語化された中に描かれる人物像にもとづいた作能を試みたのではないか、ということをさす。というのは、中世の伊勢物語注釈の世界の中に描かれる有常娘の人物像には、単に美化した至純な恋心の持ち主とは限れない姿が窺えるからである。よって、能作の背景となった筈の以上のような中世注釈世界における彼女の姿を追ってみることは、謡曲『井筒』の中に潜むシテの実像に迫るために欠かせない段取りと考えられるのである。

この考察にあたっては、『井筒』に最も大きな影響を与えたと判断される書陵部蔵『冷泉家流伊勢物語抄』(9)（以下『冷泉抄』と略す）に描かれる有常娘の人物像を手がかりとする。すなわち、主な本説と言える『冷泉抄』に描かれる彼女の心理において、業平への一途な恋心の裏面に、業平の心変わりに対する「恨み」が秘められているところがいくつか見え、至純な恋心とは異質ともいえる「恨み」を抱く女人像が『井筒』に投影されているとみられるのである。なお検討にあたっては、『冷泉抄』のみならず、『冷泉抄』系の作品と認定されるもので、有常娘の話を扱っているその他の文献の記事をも検討し、謡曲『井筒』への『冷泉抄』の投影の意味するところを考えてみるつもりである。

二、『伊勢物語』と謡曲『井筒』と

謡曲『井筒』は、『伊勢物語』二十三段の「井筒の女」の話をもとに作られたことはいまさら言うまでもない。しかし、本曲の引き歌を見て行くと、ほかに十七段の「人待つ女」の話や二十四段の「梓弓真弓槻弓」の歌、それに四段の「月やあらぬ」の歌などにも取材しており、さらには『古今和歌集』仮名序の措辞上の投影も見られる。

このうち二十三段・十七段・二十四段等が主人公の人物像の造形に密接にかかわると考えられるのだが、二十三段の話材を本説とする説では、十七段と二十四段は、本説との類縁関係に応じて用いられるにすぎないと軽く見る考えもある。(10)しかし、十七段と二十四段の女も本曲のシテである有常娘と結び付けるのが中世の理解であった点や、また二十三段の「井筒の女」を有常娘と説明する中世伊勢物語注釈書の『冷泉抄』が『井筒』に深い影響を与えている点などを考え合わせれば、単なる類縁関係による引用とは考えがたいところがある。さらにいえば、『申楽談儀』の前掲引用文に窺えるように、

言葉に大変敏感だった世阿弥が、単に類縁関係に応じた引用をほどこしたとは思えない。このようなことからいっても、十七段と二十四段からの引用にも、「井筒の女」の人物像を考えるうえで見逃せない意味が含まれていると見るべきであろう。

ここで謡曲『井筒』と『伊勢物語』との関連を検討してみよう。

先ず、謡曲『井筒』において二十三段と関連するところを挙げてみると、

①［サシ］にワキ僧が、旅の途次立ち寄った在原寺を、業平と紀有常娘の夫婦が住んだ旧跡であろうと語り、「風吹けば」の歌を詠んだのもこの所でのことであろうと語っているところ。

②二十三段の話がかなり忠実に引用されている［クリ］［サシ］［クセ］のあるところ。

③［ロンギ］に前シテが、「紀の有常が　娘とも、または井筒の　女とも、恥づかしながらわれなり」と、「有常が娘」とか「井筒の女」等の別名を持つことを明らかにしたところ。（有常娘と「井筒の女」が同一人物であることは、［クセ］の終りにも語られている。）

など、おおむね三個所が挙げられる。しかし、業平と有常娘二人が夫婦であって、「風吹けば」の歌をめぐる物語がこの二人のこととする①の設定は、『伊勢物語』そのものによるものではないことがわかる。なお、②においても、「風吹けば」の歌を中心とする二十三段の後半の物語が先に［クリ］［サシ］に語られ、「筒井筒」の歌を中心とした幼な恋の物語が後続する［クセ］に語られているという違いが見えるのも注意される。世阿弥においては、［クリ］［サシ］［クセ］が彼の夢幻能における一つの見せ場である点を考慮に入れれば、話の順序におけるこうした引用の逆転は、作者の意図によるものと見るしかなかろう。かつまた、［クセ］の、

地むかし　この国に、住む人の　ありけるが、宿を並べて　門の前、井筒に寄りて、うなゐ子の、友だち　語らひて、互に影を　水鏡、面を並べ　袖を掛け。心の水も　そこひなく、移る月日も　重なりて、大人しく　恥ぢがはしく、互に今は　なりにけり、(11)

（傍線筆者）

という部分は、二十三段本文（以下、『伊勢物語』の原文を引く場合、こう呼ぶ）の、

むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを、大人になりにければ、おとこも女も恥ぢかはしてありけれど、（本文引用は、大系本に拠る。以下同じ。）

に対応する脚色と言えるのだが、この［クセ］における傍線の部分には、水鏡に映した二人の愛情の深まりといった仕掛けが組み込まれている。これは『伊勢物語』のみならず、後述する『井筒』の本説と認定される『冷泉抄』系の中世伊勢物語注釈にも見あたらないから、作者による創意とも言えるところである。この創意が本曲の主題性と深くかかわることはあとで考究することにする。③においては、『伊勢物語』二十三段の「井筒の女」を有常娘のこととしているが、これは『冷泉抄』や『伊勢源氏十二番女合』などの中世伊勢物語注釈の世界を背景とするもので、『伊勢物語』とはかけ離れたいわば中世における伊勢物語の世界と交渉していると見てよい。

その他の引き歌や措辞上の投影に関しては、それだけでは『伊勢物語』との影響関係を探るための拠り所とはならないようであるが、その点については「井筒の女」の人物像を考えるときさらに検討することにする。

以上のように、謡曲『井筒』は、『伊勢物語』の世界をその能作の背景として作られた作品であることには異論の余地がないものの、そこに描かれる話材の典拠は、伊勢物語そのものではなく、たとえば『冷泉抄』や『伊勢源氏十二番女合』等に代表される中世伊勢物語注釈、すなわち中世の人々が解釈を加えたところの中世において新たに物語化された伊勢物語に拠るものと推定されるのである。従って本曲を理解する上で、中世の伊勢物語の世界を注釈類から再構成することが要請されることになるといってよかろう。

三、中世の伊勢物語の世界

謡曲『井筒』の本説として考えられるのは、前に挙げた『冷泉抄』系の注釈類[12]がまずあげられねばなるまい。この中には『冷泉抄』の影響が著しいと片桐洋一氏に指摘された『伊勢源氏十二番女合』も見逃せない作品と考えられる。それ以外には『和歌知顕集』[13]（以下、『知顕集』と略す）が想定されてもいる。ここではこれらの中世の注釈において、業平と有常娘による物語の世界がどのようにかたちづくられていたのかを再構成してみたい。あらかじめいえば、本曲の本説ともいうべきものは、『知顕集』による物語世界ではなく、『冷泉抄』系のそれであることを確定するわけだが、ではどうして『知顕集』ではないのかを有常娘像を通して考えてみることにする。

（一）『知顕集』における有常娘

『知顕集』に描かれる有常娘について書陵部本『知顕集』（以下、書陵部本と略す）の「伊勢物語大事」によれば、

この女は、心つきぐさにして、あだをなす時もありしかども、恩をそむくれいなければ、廿余年かれはてざりし女也。[14]

と評していることがまず注意される。これを訳してみると、「この（有常娘という）女は、物心がついているようでありながら（心が）浮つく時もあったが、恩を背くことはないので、二十年余り（業平と）すっかり縁が切れるということはなかった女である」ということになる。ここでの「恩」がどういうことなのか、これだけでは定かでないが、同書の「序詞言」に、「文をみるに、恩をしらざるものは、ちくしやうのごとし。世々に六趣にめぐりて、ながく成仏せずといへり。」（傍点筆者）とあることから、業平の夫としての愛情と解することができる。つまりこの女は、夫の「恩」を知っていたが故に、「あだをなす時」があったにもかかわらず、二十余年も業平との縁が切れることもなかったという意味であろう。これは言い換えれば、業平の「恩」さえ知らなかったら、彼女の「あだ」なところによって、業平との縁も切れるはずであった、ということにもなろう。

「あだをなす」有常娘像は、『知顕集』が他の注釈と比べて著しい相違をなすところである。『伊勢物語』初段の書陵部本の注釈に「なまいろごのむ女」、島原文庫本『知顕集』（以下、島原文庫本と略す）には「おんないろこのむもの」「このおんないろこのむものなりければ、このおとこをみて、こゝろにかけたり」などとあって、彼女の好色な面を初段の注からすでに強く打ち出しているのである。なお十段の注にも、書陵部本において、

この女は、かぎりなくなまいろこのみをたてゝ、こゝろさだまらず。

と、好色で真心がない「あだ」な姿が強調されてもいる。

このような彼女の「あだ」なところは、『知顕集』の十七段の注において業平に責めたてられるわけであるが、この責めたてに対して有常娘は、「あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人も待ちけり」の歌を詠んで弁明したと説明されることになる。このことを書陵部本は、「さだまりたる心なればこそ、けふまでおとこもせず、ひとりありて、もとのおとこをば、まちつけたれ、とよめる也」と解釈する。すなわち、別の男を受け入れずに「年にまれなる人」を一人で待

ちつけたことは、自分が「さだまりたる心」を持っているからこそのことだというのが、書陵部本に説明される有常娘の弁明であった。それに対して、業平が「けふ来ずはあすは雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」の返歌をしたわけだが、書陵部本では「我けふとくきたればこそ、おのれがおとこなきはみつれ。いましばしおそくだにきたらば、おとこはしてまし」と、有常娘の「あだ」を業平が再び責めたと解釈する。こうした十七段の注釈の姿勢には、これまで強調されてきた有常娘の「あだをなす」人物像がそのまま当てはめられているのであって、「あだなりと…」の歌を詠んで自分の「さだまりたる心」を主張した彼女の言い訳も、それこそ真心のない「そらこと」とみなしていることになろう。従って、「いましばしおそくだにきたらば、おとこはしてまし」と、業平が彼女の「あだ」を責めたと説明するのは、有常娘像を好色で「あだをなす」人物と一貫して解する『知顕集』の注釈態度の一つの表れと言える。

なお、書陵部本は、貞女の物語である二十三段を、

この物語は業平の事にはあらず。はるかにふるきよのものがたりを、これにかきまじへたる也。（傍線筆者）

と、業平と有常娘の話でないことを主張することで、有常娘に貞女のイメージを与えまいとする態度が窺えるのである。

本稿の序文において、謡曲『井筒』の有常娘の造型を、おおむね至純なイメージで捉えている今日の享受者達の『井筒』観を問題点として取り上げたが、そうかといって、彼女の至純性を全面的に否定することはできない。しかし、以上のような『知顕集』の注釈からすれば、ここで解釈される有常娘像が謡曲『井筒』のシテの人物像と大きくはずれることはいうまでもないことであろう。『井筒』の本説に『知顕集』が据えられないゆえんである。

（二）『冷泉抄』における有常娘

（1）物語の再構成

『冷泉抄』には、二十三段前半の「筒井筒」の物語が、

有常が娘と業平と、おさなかりし事也。

と、業平と有常娘のことであることが明らかにされている。これは、歴史的事実としては勿論有り得ないことであり、また『知顕集』とは異なって、『伊勢物語』全段を業平の物語として解釈するこの抄の特徴が窺えるところでもある。

この「筒井筒」の物語は、『冷泉抄』に描かれる業平と有常娘の物語としては、最も初期の話にあたると言えるが、この『冷泉抄』の注釈態度に関して、片桐氏が、「一段一段を独立させず、全体を一つの物語として見る態度」[15]と指摘する説に従えば、この「筒井筒」の物語から始まる有常娘の物語は、いわば彼女の一代記とも言うべきかたちをとって、『冷泉抄』から再構成することができることにもなる。ただ、有常娘の一代記としての物語の再構成というようなことは、これまでの先行研究には管見の及ぶ限り見あたらないようである。そこで本稿においては、有常娘に関する各章段の注釈を一代記的物語として見る方法をとることで、『冷泉抄』におけるその物語化の方向を辿り、こうした一代記的物語の中に描かれる有常娘を追ってみることにする。その場合、有常娘の一代記は、業平との愛情問題と密接に絡み合いつつ展開される、いわば彼女の恋心の軌跡とも言えるから、二人の恋の軌跡を具体的に追うことでもある。

(2) 幼な恋

二十三段の物語の前半を、『冷泉抄』は先ず、これを二人の幼な恋の物語として解するのだが、その拠り所は、

むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびける

といった短い文に求めている。これに関して『冷泉抄』は、「阿保親王と有常と大和国に住ける時、春日の里についぢをなして住ける時の事」と指摘して、この物語が「春日の里」でのことということを先ず明らかにする。そして、

井のもとに出てあそびけるといふは、二人の子互(たがい)に五歳にして井筒の指(さし)出たるに長(たけ)をくらべて、これよりたかく成たらん時は、夫婦にならむと契けり。

とし、さらに、

哥に、つゝ井筒とは、二人ながら五歳になりし時、井づゝに長(たけ)をくらべて、これよりたかくなりたらん時、夫婦たらむと契し事也。

と説明する。幼な恋が「二人ながら五歳になりし時」のことで、この時、井筒に丈くらべをしながら、将来自分たちの背

が井筒の高さを超えたなら「夫婦にならむ」と約束したと解釈する。背が井筒の高さを超えただろう時、即ち身体的に成長したあと結婚しようと約束したのが五才の時だというのである。

ところが、同じ段の別の注では、「業平五歳の嫁（とつぎ）、実也。」「されば五歳にて嫁たりつるにや。是は好色の道に長ぜる故也。」と、五才の時既に二人は結ばれたとし、前の注と矛盾しているところが見える。内容におけるこうした矛盾は『冷泉抄』の随所に散見されるが、『冷泉抄』のみならず、中世注釈世界全般にわたる一つの特色とも見受けられるものである。ただ、『冷泉抄』においては、『知顕集』とは異なって、業平の好色性が全体的に強調され、このところに見える矛盾も、

「又、或本には、長能記云、男女会合の道七歳契、業平五歳嫁事、五行陰陽之徳をあらはせりと云々。又、家の口伝にも、業平五歳始男女嫁、知是之表五行之陰陽、知非凡人。されば、業平五歳の嫁、実也。」「されば五歳にて嫁たりつるにや。是は好色の道に長ぜる故也。」などといった説明に窺えるように、物や事の始原にきまって据えられる陰陽五行説を、この物語の始発にあたって「子」の年齢にあてはめて早熟な恋を語り、業平の好色性を強調するためであった。このような好色性にそって、異説や異なる口伝をそのまま受け入れる態度をとることから前掲のごとき矛盾が生じたものと考えられる。

業平の好色性は、初段において、

昔男といふに付て二の義有。一には、業平下位下官にして后斎宮の上位を犯し奉る事をかく故に、我名をかくして昔男といふなり。是当家の義也。

と、「昔男」の解釈にも適用され、二十三段の後半の注釈にも、

河内へ行事、好色のならひにて、（中略）好色を面に立る也。

と、一貫して強調されている。従って、この『冷泉抄』における「業平五歳の嫁」の説からは、それが事実としての結婚であったということよりも、業平が「好色の道」において「非凡人」であったという意味だけをひとまず取ることにして、五才の時にあったことは、「夫婦にならむ」と約束したことだけだったと、読み取っておくことにする。この抄に描かれる有常娘の一代記的物語[16]の追跡にとって、この解釈の方が後の物語の展開と整合するからである。堀口康夫氏も「待つ女――「井筒」の手法」において中世人の『伊勢物語』享受の姿勢を捉えて、「業平の実相はすべて仮相としてあらわされて

いるのであり、そのかぎりにおいて、矛盾する表現も、その裏にひそむ真実に想いを至せば、すべてが解決する」と指摘するが、このところにおける矛盾の裏にも、業平の好色性による愛の遍歴を描こうとする中世注釈家の意図がひそんでいると考えられるのである。

(3) 未婚の時代

井筒のほとりで業平と有常娘二人が将来を約束したのは五才の時であったが、その後の二人の関係が知られるのは、初段の「うゐかうぶり」の話に関する注釈である。

「筒井筒」の物語のゆかりの地が「春日の里」であるとする地名設定は、初段の物語に、

むかし、おとこ、うゐかうぶりして、平城(なら)の京、春日の里にしるよしして、狩りに往にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。このおとこ、かいまみてけり。　(傍点筆者)

とあるところから、この初段の物語と前掲の「筒井筒」の物語とを結び付けて解釈しようとする注釈者の態度によるものと察せられる。なおこの初段の「女はらから」は、『冷泉抄』の四十一段の注釈において、

女はらからとは、有常が娘二人也。ひとりはいやしき男もたる、まづしきとは、業平が妻の妹なり。(中略)あてなる男もたるとは、業平也。彼妻の姉なり。

と説明されていて、この四十一段の物語もこの二人に関わる話として結び付けられていることがわかる。さらにこの四十一段の注釈にいう「あてなる男」は、十段の物語に出てくる「あてなる人」とつながっていくことになる。有常娘の話として解される各章段は、こういった仕組みによって緊密に結ばれているのである。

片桐洋一氏はこうした『冷泉抄』の注釈態度を、「各章段のあらゆる記述を等価値・同次元において互いに矛盾のないよう合理的に処理する態度」[17]と説明するが、これこそ、中世における新たな伊勢物語の世界の創出とも捉えられるのであって、前述の章段以外にも、十七・十九・二十・二十四・三十三・四十・四十三・九十五段等、その女主人公を有常娘として解する各章段は、一つの物語の展開として捉えられるのである。このような注釈態度こそ新たな物語の志向といってよ

いものであろう。

このような『冷泉抄』の注釈態度からすると、初段の注釈に、

初冠とは、元服の始なり。是は業平十一より東寺の真雅僧正の弟子にて有けるを、十六の年、承和十四年三月二日に仁明天皇の内裏にて元服する也。わらは名曼陀羅也。秘事也。

とあるのは、二人の睦まじかった幼な恋が、十一才の時業平が真雅僧正の下に行儀の見習いのために弟子入りすることによって途絶えたと見ることができるのである。元服する前の「わらは名」が「曼陀羅」というのは、その弟子入りの際に授けられた仏門上の幼名を意味するととれる。真雅僧正の居住地が京の東寺であることからいって、この年から業平は、有常娘の住む「春日の里」を離れて京へ去っていたことになる。つまりここには、業平が京へ去ることによる初めての別離のあったことが読み取れるのである。この解釈によれば、また業平は「十六の年」に仁明天皇の内裏で元服したとする。従って、初段の「ふるさと」の注釈において、

業平、天長二年四月一日（イ八月十八日）ならにて生れたりしかば、平の京にて男に成て、又ならへゆけば古里といふなり。（傍線筆者）

とある「平の京」は、旧都平城京のことではなく、新都の平安京のことであろう。この引用文の傍線部による限り業平は、奈良で生まれて幼年を過ごしたが、おそらく真雅僧正の門下に入るのを契機に故郷を離れたということになる。

このように、長い間それぞれ京と「春日の里」とに離ればなれに住んだ二人は、業平が元服して勅使に命じられ春日の祭りに赴くことを機に再会することになるわけである。

こうして成年になって久しぶりに幼なじみの家を訪ねた業平は、「夫婦にならむ」と約束した幼かりし時のことが恥ずかしく思われてすぐさま有常娘に会えなかったようで、初めはただ垣間より覗き見するしかなかったと見える。初段の物語におけるこの垣間みを解して『冷泉抄』は、

かいまみてけりとは、是に二の義有。一には、かきまよりのぞき見るをいふ。二には嫁の義也。業平有常が娘を嫁たりけるをいふ。（傍線筆者）

と説明し、さらに、「狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。」の注釈においても、

業平必紙をもたぬにはあらず。上古の男女の契を思ひて狩衣のすそをきりて帯のやうにつけて春日野の哥を書きてやる也。（傍線筆者）

と説明しており、この時以降業平が有常娘と契りを結んだとする方向に解釈を進めて行こうとする趣が窺われる。こうした趣は、前にも挙げたような業平の好色性にもとづいた注釈態度とかかわるところであろうが、それはともかく、久しぶりに幼なじみの有常娘を垣間みた業平は、彼女の成長した優美な（「なまめいたるといふは、やさしき心也。」）姿に一目惚れし、改めて恋におちいり（「心地まどひにけりとは、やがて恋しき心になるをいふ也。」）、その心情を「かすが野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限り知られず」の歌に載せて贈ったというのである。こうした業平の心情を『冷泉抄』は、「しのぶのみだれ限り知られず」の解釈に託して、

しのぶのみだれかぎりしられずとは、忍摺のみだれたる様に我恋にしみだれたりといふ。是は有常が娘を思ひみだるゝ事也。

と説明する。成長した有常娘の優雅な姿を目の当たりにして、業平の心は恋心に乱れたわけである。ここには京で元服したあとすぐに、再び有常娘の前に戻ってきた業平の有常娘への求婚が語られるのだが、これは二十三段の前半の「筒井筒」物語において、歌の贈答によってお互いに成人したあと結婚しようと約束した二人の姿と繋がる新たな物語化の方向が秘められていると考えられるのである。

ここで「筒井筒」の物語を収める二十三段前半の本文を引用すると、

むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを、大人になりにければ、おとこも女も恥ぢかはしてありけれど、おとこはこの女をこそ得めと思ふ。女はこの男をと思ひつゝ、親のあはすれども、聞かでなんありける。さて、この隣のおとこのもとよりかくなん。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべき

などいひ〳〵て、つゐに本意のごとくあひにけり。

（傍点筆者）

とあるが、初段の注釈との繋がりを考えつつ、この本文を読めば、傍点部の「大人になりにければ」は、まさに初段の「平の京（平安京）にて男に成」ったことをさすことになる。京で元服を遂げ、背が井筒の高さを超すくらい成長して帰って

きた業平は、有常娘への恋心に耐えられず、「筒井筒…」の歌を贈ってプロポーズしたのである。初段の「かすが野の」の歌が恋慕の告白とすれば、この歌は正式の求婚歌ということになろう。即ち、「二人ながら五才になりし時、井づゝに長をくらべて、これよりたかくなりたらん時、夫婦たらむと契し事」があったが、私の背はあなたを見ないうちに井筒の高さを超してしまったようだ（「まろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに」）から、その幼い頃の約束通り夫婦になろうと、元服の自覚にたつプロポーズを行なったわけである。そしてこれに答えて有常娘も「くらべこし…」の歌を返し、「君ならずして」誰のために結婚のための髪上げをしようかと、その純愛を示したことになる。こうした有常娘の純愛には、業平が京へ去った間もただ業平だけを待ち続けた姿、すなわち「人待つ女」の原型が読み取れる。

（4）結婚問題、そして結婚

二人のこうした結婚の意志の相互確認に至るまでには、十段本文の「父はこと人にあはせむといひける」や二十三段本文の「親のあはすれども、聞かでなんありける」等に基づく物語化として、それぞれには別の結婚問題がおこったと『冷泉抄』は説く。

十段の注釈には、

こと人にあはせんと云は、平中将定文をむこにとらんとする也。

と、父の紀有常が、娘の婿として平定文を縁づけようとしたことを述べ、さらに、二十三段の注釈には、

おやのあはすれどもきかずとは、有常が娘は平の定文にあはすれども、娘これをきかず。業平も、良相大臣の聟になさんとすれども、きかざる也。

とあって、業平にも良相大臣の娘との結婚問題がもち上がったとするのである。有常娘の結婚については母の有常妻にふれて、

母はあてなる人と云は、業平に合せんといふなり。あてなる人とは、よき人也。我見てさへむしんにてかけつべき程に、とても夫をもたば此男を娘にも合ばやと思ふなり。

と、身分が高くて上品な「あてなる人」の業平を見て、もし自分に夫さえいない身であったならば、母親自ら何のわだかまりなく飛んで行ってプロポーズしただろうが、とても自分には結婚できないので、せめて娘にでも結婚させたいと思うくらい惹かれたという。『冷泉抄』はこうした母の心情から娘と業平の結婚を画策したことを、雁を使った祭りに託して説明する。即ちこの祭りとは、

田面にて、かりを芦の根にてつなぎて、茅かやにて人形を作て、一に、はなつべき人、二には、可合人の名字を書之付。此祭をして、さけんと思ふ男女の方へは雁をむけずして、合せんと思ふ人の方へ雁をむく。

というものであって、母は「定文をはなちて、業平を合せん」という心情で、

有常が妻の心は、業平のかたへ一向に雁をむけておひたてるといふ也。心に業平をとおもへるを、如此いふ也。

と、業平と娘の結婚を切に願ったという。

このように、十段においては、娘の結婚相手を選ぶにあたって有常夫婦の意見の対立が描かれ、業平と有常娘二人が結ばれるまでには問題も起こっていたことが説明されているわけである。

しかし、こうした問題が起こったにもかかわらず、二人はそれぞれに別の相手との親の結婚話に一向に耳を傾けなかった。それというのも、二人の愛がそれ程深く確固たるものであったからであろう。

このような過程を経て、二人は、五才の時の約束通りに夫婦となるわけであるが、これを表わすのが、二十三段の「本意のごとくあひにけり」を解釈した、

ほいのごとくあひぬとは、本意のごとく夫婦となるをいふなり。

である。なお前掲の四十一段の注釈に、

あてなる男もたるとは、業平なり。彼妻の姉なり。

とあったが、これも二人が結婚したことをふまえて、四十一段の物語を有常娘の物語にとり込んだことを示している。

（5）結婚生活―有常の家の没落と結婚生活の危機―

五才の時に、背が井筒の高さを超せば「夫婦とならむ」と約束して、やがて京と奈良とにそれぞれ離ればなれになって住んだが、有常娘は業平の帰郷を心待ちし、親が別の男との結婚話を持ち出しても拒絶し、幼時の約束通り二人は、その「本意のごとく」夫婦となったのである。

しかし、この『冷泉抄』は、十一才の時東寺真雅僧正の下に弟子入りして以来、十六才で元服して奈良に帰郷するまでの長い間、業平は幼な恋など忘れていたかもしれないという解釈を窺わせる。というのは、奈良に戻って来て、垣間から覗いた有常娘の成長した「やさしき」姿に改めて心惹かれて、「やがて恋しき心にな」り、「有常が娘を思ひみだるゝ事」になったとあるが、『冷泉抄』における業平の恋は一時的であり、気まぐれなところがあるように注釈するからである。一段本文の「いちはやき」の解釈において、『知顕集』が「せちなる心」（書陵部本）「せつなりといふことば」（島原文庫本）などと、業平の切ない真心を説明しようとするのに対し、『冷泉抄』は「早速の義なり」と、その外面的なすばやい行動を説こうとするのも、業平のそうした気まぐれなところを表現しようとした試みではなかろうか。いうなればその場限りの愛とも見える『冷泉抄』における業平の愛情遍歴は、結婚後間もなく有常の家が没落すると同時に始まると言える。これは二十三段の「風吹けば」の物語に基づく解釈に読み取れるところであるが、その本文をここに引用する。

さて、年ごろ経るほどに、女、親なくたよりなくなるまゝに、もろともにいふかひなくてあらんやはとて、かうちの国、高安の郡に、いきかよふ所出できにけり。さりけれど、このもとの女、悪しと思へるけしきもなくて、出しやりければ、おとこ、こと心ありてかゝるにやあらむと思ひうたがひて、前栽の中にかくれゐて、かうちへいぬる顔にて見れば、この女、いとよう假粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらん

とよみけるをきゝて、限りなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。

ここで「女、親なくたよりなくなるままに」とあることを『冷泉抄』は、

彼女母、有常の妻あまになつて大原に籠るをいふなり。

と説明する。『冷泉抄』のこの段の注釈だけでは彼女の母が何故出家したのかが明らかでないが、男が、「もろともにいふ

かひなくてあらんやは」と、女と諸共にしがない暮らしをしていてはたまらないと思って高安の郡の女に通おうとしたとあるところから、女の実家が経済的な没落を迎えたための出家ということが察せられるのである。

有常家の経済的な没落に関しては、八十段の注釈において、

おとろへたる人の家とは、有常まづしく成て家のおとろへたるをいふ也。

と明らかに説かれており、二十三段における母の出家も、本文の「もろともにいふかひなくてあらんやは」と考え合わせれば、この八十段に説かれる経済的な没落と密接に繋がると考えられる。こうした有常娘の実家の経済的な没落は、業平にとっては、経済的な後見の喪失をも意味するだろうが、そこで新たに経済的な援助を求めて、「かうちの国、高安の郡」の新しい女に通おうとした。これを『冷泉抄』は

妻にいひ合て高安のこほりのぐんし丹波介佐伯忠雄が娘のもとへ通ふ。　（傍線筆者）

と説明し、業平は妻に相談して通い始めたという。これは言い換えれば、新しい女に通うことを妻の有常娘が許したことを意味する。これは、後文の、

業平、河内の国へ行をあしと思へる気ざしのなきを、け惣よくしてといふなり。

とも繋がり、彼女の心の内奥はどうであれ、少なくとも表面的な「気ざし」は、許諾を示したことを意味する。

ところが、『冷泉抄』は、業平の河内行を経済的な理由だけによるとはとらず、

河内へ行事、好色のならひにて、（中略）好色を面に立る也。

と、経済的な理由よりはむしろ業平の好色な性格を表面に立てている。このような解釈に『知顕集』の業平像と異なるところが窺えるのであって、『冷泉抄』は、業平の「好色のならひ」即ち好色な性癖を一貫して打ち出しているのである。

有常娘にとっては、この事件は、結婚後最初に訪れた結婚生活の危機と言える。様々な不安を抱えつつ有常娘は夫の夜道を案じた「風吹けば」の歌を詠み、河内へ行くふりをして「前栽の中にかくれゐて」これを聞いた業平は、感心して河内へ行かなくなったという話である。妻の行動に感心して改心したわけであるが、業平の河内行は、経済的な理由よりはむしろ心の問題によるものということがここからも読み取れる。夫による別の女性への通いを有常娘が「あしと思へる気

ざし」を見せずに許したのは、経済的な面を配慮してのことであったが、夫の業平は、経済的な貧窮よりは「好色のならひ」によって通ったということで、これを『冷泉抄』は、「好色を面に立る也」と決めつけているのである。そして『冷泉抄』は、後に詳しく触れるが、同じく業平・有常娘の話とする十七段や二十四段の注釈において、好色な夫業平が長い間の孤閨生活を強いることに対して一抹の恨みを抱き、また京で別の女と恋愛事件を起こしたことを「無本意」に思ったとする注釈を施している。こうした解釈を受けてか、『冷泉抄』の影響が著しい『伊勢源氏十二番女合』では、この二十三段の「風吹けば」の歌を有常娘は「うらみくひ」る心情で詠んだとするのである。ここであらかじめ有常娘の心の揺れに関するこうした解釈を取り上げるのは、この「風吹けば」の物語が謡曲『井筒』の重要な話材の一つであるからである。さらにいえば、『伊勢源氏十二番女合』に解釈される「うらみくひ」る心情にこそ、本曲のシテの人物像に迫るための手がかりがあるのではなかろうかと考えられるからである。

ところで、『冷泉抄』によれば、その後業平は、宮仕えする身なので妻の有常娘の許を再び去って京へ帰ったとする。これは二十段の注釈において、

宮仕する人なればかへるとは、業平、奈良に久敷ゐて京に帰る也。

とあるところと、二十四段の注に、

男宮仕しにとて、別をしみていにけりとは、文徳の御時、業平宮仕しに、平の京へ行をいふ也。

とあるところに説明されている。この二十段や二十四段はそれぞれ「有常がならに住けるに、其娘のもとに、業平始てよばひける時の事也。」（二十段）「有常、大和にすみし時、業平彼聟にてゐたりし時の事也。」（二十四段）等と同次元の話として結び付けられており、さらに一段の「平城の京、春日の里」での出来事ともその地名の同一性によって結び付けられているといえる。

宮仕えしに業平が京へ去ったことは、十七段の注釈にも、

年頃音づれざりけるといふは、業平宮仕に京へ行て、彼二条の后の事故に、東山に押籠られて、三とせこねば、年比と云也。又云、貞観十三年の花盛に京へ行たりしが、二条の后の事によりて、東山に押籠られて、三年まで、有常が娘の本へといかぬを、年比と云。（傍線筆者）

とあって、各章段を矛盾なく結び付けようとする注釈家の意図が歴然と見える。ここで注目すべきことは、この引用文には、宮仕えしに京へ行った業平が二条の后という天皇の御妻—業平からすれば別の女だが—と恋愛事件を起こしたということが記されている点である。二十三段の話との繋がりに添って考えを進めれば、「風吹けば」の歌に心を打たれて改心した後間もなく、業平の「好色のならひ」があらためて頭をもたげてきたわけである。『冷泉抄』の注釈による限り、夫のこうした好色性は、既に妻によって察知されていたものと見受けられる。というのは、二十段の「大和にある女」の返歌の「いつの間にうつろふ色のつきぬらん君が里には春なかるらし」を解した次の注釈にそうしたところが窺えるからである。

いつのまにうつろふ色のつきぬらんとは、我をふかくおもふとはいへども、小町にあはむとて、我には秋にてのぼり給ふ程に、御心の色の秋なるよりやがてもみぢしぬ。我を思ふ春はなしといへるなり。

これは業平が妻への深い恋情を紅葉にたとえて贈った「君がためたおれる枝は春ながらかくこそ秋のもみぢしにけれ」の歌に答えた返歌の解釈であるが、「我をふかくおもふとはいへども、小町にあはむとて、我には秋にてのぼり給ふ」といったところには、夫への強い不信感が描かれているとするのである。すなわち、「あなたが私を深く愛するとは言っていますが、小町という別の女の許に通おうとして、私にはもはや飽きてこの秋に京へ上っていらっしゃる」と、夫の真心を疑っているところに、他ならぬ業平の常日頃の「好色のならひ」を気にかける妻の心情が表れていると考えられるのである。（ただし、この解釈でいう「小町」とは、十八・三十七・四十二・六十・百十三段等に「小野小町」という具体的な名が見えるから、中世語としての若く美しい女性という意ではなく、業平・小町の恋愛譚の中の小野小町と見てよい。従って、この二十段の「小町にあはむ」というところも、『冷泉抄』に散見されるこの二人の恋愛譚を背景とした注釈と見なくてはなるまい。）

さて、前述のような有常娘の危惧の念は、業平が二条の后高子との恋愛事件を起こすことによって現実化したわけであるが、四段の注において、

二条后たゞ人にておはせし時、業平夫婦の契有けるに、思ひの外に后に成ておはするに忍てかよへば、本意ならずして通と云也。

とあるように、二条の后に通い始めた頃には、高子がまだ后になる前の「たゞ人」だったという。それが「思ひの外に」

后となって業平の恋に翳りがさされ、忍ぶ恋を強いられたわけである。これと同じ設定が六十五段の注釈にも見えるが、「二条の后未だ女御だちにて座し時の事」とまだ后になる前のこととし、「二条后と業平と忍てあひ給ける」と二人の密会を記している。

この二条の后への業平の恋情は、四段の「月やあらぬ」の歌をめぐって広く知られている業平の失恋談にも窺えるように、並々ならぬものであったようである。これは六十五段の注釈に、

里へ行とは、二条后の御もとへ、業平あまりにしげく通ふ間、かくてはあしかりなんとて御里長良卿の宿所へ座す也。内裏にては皆京を里といふなり。

と、宮中では業平が二条の后のところへ忍んで通ってゆくことがあまりにも頻繁なので、后は里下りして、実家である長良卿のところへ預けられたとするところからも窺えることである。

業平のそうした頻繁な忍び通いはやがて発覚するところとなった。二条后の里下りは后への譴責としての処置であったのだろう。処罰は業平にも及んだ。十七段の注釈において、

二条の后の事によりて、東山に押籠られて、三年まで、有常が娘の本へといかぬ

とあることや、二十四段の注釈に、

三年こざりけりとは、二条の后の御事故に、忠仁公にあづけをかれて、ゆかざるをいふ也。

とあることなどに説明されるように、業平の身柄は、忠仁公藤原良房によって東山に三年もの長い間押し込められた。この業平への譴責は、二十四段の注釈などから「勅勘」であったとされている。

東山に押し込められたことは、六十五段の注釈においても、

此男をばながしつかはすといふは、東山にをしこむるなり。

と記されており、『冷泉抄』は、この二条の后との恋愛事件による三年間の監禁生活のため、業平は妻の有常娘の許へ行けなかったとする。しかし、業平が妻の許へ帰らなかったことは、単にこの監禁だけによるものとは限れまい。これまで指摘してきたような業平の好色性に添って考えを進める限り、東山での束縛生活によらずとも、業平の有常娘へ向ける足取りは途絶えていたと見るべきではなかろうか。これは、二条の后との恋愛譚とする六十五段においても、

此男女方ゆるされたりけるとは、業平は宮の御子にて座せば、内裏の内はいづくをもきらはず、女御后の座す所をもゆるされて座すをいふなり。或は唯業平好色に長ずる義をいふとも申なり。（傍線筆者）

と、業平の好色性に焦点を当てようとする解釈が見えるからである。

前にも触れた通り、結婚後間もない有常娘の実家の没落にかこつけて業平の別の女への通いが始まったのが、有常娘にとっては最初に接した結婚生活の危機であったと言える。が、業平の色好みはそれにとどまらず、宮仕えしに京へ上った後も再び別の女との恋愛事件を起こすことによって繰り返されたわけである。五才の時の幼な恋の解釈にも、業平の「好色の道に長ぜる」性癖が当てはめられたが、こうした業平の好色性は、結婚後においても、別の女への通いの形で発揮されたのである。このように、『冷泉抄』における有常娘の結婚生活は、業平の好色性によって揺るがされ、ついには破綻を迎えることになるのである。

（6）結婚生活の破綻

二条の后との恋愛事件を起こしたため、忠仁公によって業平が東山に押し込められたという三年間、有常娘は閨怨を堪えながら待っていた、とする話が十七段の注釈に描かれている。

先ずここに十七段の本文を引用しておこう。

年ごろをとづれざりける人の、桜のさかりに見に来たりければ、あるじ、

あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり

返し、

けふ来ずはあすは雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや

この短い章段の解釈にあたって、『冷泉抄』は、次のような二十四段の注釈と結び付けて解釈しようとする。

待わびたりけるに、いとねんごろにあはんといへば今宵あはんと云は、仁明天皇御子つねやすの親王を、あこが夫にし奉らんとて、こよひやくそくしたりける夜、業平勅勘ゆりてきたれる也。或本云、今夜あはんといふとは、業平三とせこざりければ、さのみひとりあるべきにもあらずとて、さがの天皇十三の御子つねみの親王、あこが夫にし奉らんとしける夜、業平ちょつかんゆりて来なり。

（傍線筆者）

つまり、業平が三年間も帰ってこないので、長すぎる孤閨の生活に耐えきれず、「まちわび」て、「さのみひとりあるべきにもあらず」即ち「そういつまでも一人で（待って）いることもできない」と思って、別の男を新しい夫として迎え入れようとしたと『冷泉抄』は説いているのだが、十七段の注釈の末尾において、

新枕すれとよめるにて聞へたり

といった文句が付け加えられることによって、この二十四段は十七段と結び付けられており、十七段と同次元において捉えられている話と見ていることになる。

それゆえ「年ごろをとづれざりける」というのは、業平が三年間の束縛生活によって有常娘の許へ行けなかったと説明される事柄と結び付けられていることになり、この短い章段の背景には、夫の帰りを待ち続けて三年も経った有常娘が、あまりにも長い孤閨なので待ちきれなかった、という情況が設定されることになる。

ここで「あだなりと…」の歌を詠んだ有常娘の心情を捉えて、長い間来ないことに対する恨みの吐露を読み取る次のような解釈が見えるところは注意してよかろう。

久敷こぬとうらむる為に、[18]あるじの心をとらむとて、一向に花のうへ斗を、さあらぬ由にて詠ぜるにやとおぼへたり。今日来たれば盛なる花とも見つれ、明日、雪と見ては、我身も花も曲なしといへるにや。

（傍線筆者）

この注釈は、その「あだなりと…」の歌を詠んで業平を責めたてたところ、業平が「けふ来ずは…」の歌によって恨み返したことを説明した部分である。

ここに見える有常娘の「恨み」は、『冷泉抄』における有常娘像を考える点で重要な意味を持つと考えられる。というのは、有常娘は、いつまでも至純な恋心を保ちながら業平を待ち続けたのではなく、耐えきれないほど長い孤閨生活を強いる業平に対して一抹の恨みを抱いていた、ということをこの注釈は意味するからである。これは言い換えれば、有常娘の心の内奥には閨怨が芽生えていたということになる。従って、このような解釈はまた、二十四段の注において、三年間も帰ってこない業平を「待ちわび」て、「さのみひとりあるべきにもあらず」と、孤閨に耐えきれないことを吐露したとするところとも緊密に繋がる。二人で「いひあはせて」河内の高安の女のもとに夫を行かせた時は、表面的な「気ざし」

には許諾を示せた有常娘であったが、三年間もの長い孤閨生活には耐えきれず、心の中に秘めてきた「恨み」をもあらわにせざるを得なかったとするのであろう。

二十四段の注釈によれば、このように「待ちわび」て「さのみひとりあるべきにもあらず」と寂しさにくずおれていた折、「いとねんごろにいひける人」が近づいて来たのであり、この男が「仁明天皇御子つねやすの親王」だったと『冷泉抄』は説明する。そしてこの男を迎え入れて新たに新枕に至ったその夜、勅勘を許された業平が有常娘の許に帰ってきて、「この戸あけたまへ」と門を叩いたのである。このあまりにも悲劇的な運命のいたずらに直面した彼女は、さりとて門を開けるわけにも行かず、開けないままに「あらたまの年の三年を待ちわびてたゞ今宵こそにゐまくらすれ」の歌を詠んで、外にいる男に差し出すしかできなかったのであろう。

この時の状況を『冷泉抄』は次のように説明する。

業平二条の后の御事故に、勅勘を蒙れば、有常が娘の為には、無本意思ひて来りけれども、無左右うちとけざりけるを、戸もあけでといふ也。（傍線筆者）

ここで傍線の部分を訳すと、「有常娘にとっては、（別の女と恋愛事件を起こしたことを）不本意に思って、（業平が）帰ってきたけれども、ためらって打ち解けなかった」となろう。ここには、二条の后との恋愛事件を起こしたことに対する有常娘の不満が漂わされている。要するに、有常娘の閨怨は、単に長い間夫が帰ってこないことだけに限らず、自分を去って別の女に通ったことにも起因するのである。

前引の十七段は、このような物語を受けているわけである。そうした彼女の心情とはうらはらに、業平は却って彼女の「あだなる」ところを責めたのである。これに対して『冷泉抄』は、

有常が娘を、もとあだなると業平いひたるが、あだならば、かくまれ成人をばまたじ、三年を待つけたればと云也。

と解釈し、三年間も待ったことを強調して彼女の「あだ」でないことを弁護する立場をとっている。有常娘を「人待つ女」と造形する姿勢がこの解釈と響き合う。ここで「三年」というのは、言うまでもなく、前述の業平が東山に押し込められていた期間として、二十四段の「三年」と結び付けようとする態度によるものである。なおいえば、この「三年」というのは、『知顕集』系諸本には語られていない期間である。『知顕集』における好色で真心がない「あだ」な有常娘の姿の強

調とは対蹠的な人物像の解釈と言える。

『冷泉抄』に描かれる真心のある有常娘のイメージは、二十四段の注釈において、「女のうけじとてこざりければ、業平出ていなんとしける時」に彼女が詠んだとする「梓弓引けど引かねど昔より心は君によりにし物を」の歌の解釈においても、

あづさゆみひけどひかねどとは、君が我に逢時もあはぬ時も、心は君によるといふ也。

と、一貫して窺える。夫が京で別の女との恋愛事件を起こしたことを「無本意」に思ったことも、夫への愛情があってこそのことであろう。いうなれば、有常娘の業平へのこうした心情には、愛情と恨みが綯い交ぜにされていると見受けられるのである。

ところが、こうした有常娘の夫への切ない思いにもかかわらず、夫の業平は、「梓弓真弓槻弓年をへてわがせしがごとうるはしみせよ」の歌を残して去って行くのである。この歌について、『冷泉抄』では、

あづさ弓まゆみつきゆみとは、三張の弓也。三張の弓は、三春也。三春は、三年也。三年あはぬ事をいふ也。

とあり、また、

我せしがごとうるはしみせよとは、かごとと云に、二の義有。[19] 常にはむつごと也。是はちかごと也。

とあるから、これに従ってこの歌を訳すと、「三年間会わずに過ごしてきたが、（そう心変わりせずに）かつて私と結んだ約束通りに愛情を示せよ」の意となろう。男は却って女の変身を詰る歌を残して去って行くわけである。ここには、結婚生活の破綻、さらには「筒井筒」の物語に端を発する二人の長い間の恋物語の終焉を予見せしめるところの、二人の間の深い亀裂が窺われる。

このように去って行こうとする業平に対して有常娘は、「梓弓引けど引かねど…」の歌を詠んで、変わらぬ愛情を訴えて留めようとするが、業平はそのまま去って行くのである。有常娘は、恋の終末が「いとかなしくて」、男の後を追って行ったが追いつけず、「清水のある所」にうち伏して泣いたとする。

『冷泉抄』はこの場面を、

有常が家の前に清水の有所までついづ、追て行ども、とまらざりければ、そこに打臥てなきけり。
の場所也

と説明する。ここで注目してよいのは、「清水のある所」が「有常が家の前」にあって、それが「つゝいづゝの場所」だとする点である。これは他ならぬ二十三段の「筒井筒」の物語のゆかりの地そのものをさすところであり、二十三段とこの二十四段の話を密接に結び付ける仕組みと言えよう。そして、二人の恋物語の始発と終焉の有様を「つゝいづゝの場所」の上に同時にオーバーラップするところでもある。

さらにここで注目すべきことは、業平はその「つゝいづゝの場所」に止まらず過ぎ去って行くが、一方の有常娘は「そこに打臥てなきけり」とするところである。二人の行動におけるこの食い違いには、これまでの『冷泉抄』に説かれた好色で真心のない業平像と、夫の帰りを待ち続けた有常娘像を象徴する行動が表現されている。つまり、「つゝいづゝの場所」をそのまま過ぎ去る業平の姿には、色好みであるが故にこれからも引き続く彼の果てしなき愛情遍歴が象徴され、そこに執心あり気にうち伏して泣きひしがれる有常娘の姿には、愛の宿命を見透かしていつまでもそこを離れまいとする切ない情念が象徴されているように思える。言い換えれば、この「つゝいづゝの場所」とは、業平にとっては愛の遍歴の途上の過ぎ去る一地点にすぎず、一方の有常娘にとっては、恋の始発点であると同時に帰結点でもあることを意味するところである。

このような愛の終末を目の当たりにした有常娘の様子を、『冷泉抄』は、

そこにていたづらに成にけりとは、死たるには非ず。業平のふり捨て行を見て、いたむまじきかほになるをいふ也。さればいたづらなり。

と説明する。すなわち、「いたづらに成にけり」が、死んだという意味ではなく、業平が振り捨てて去って行くのを見て決して傷つけられまいとする表情になることを意味する、と説明しているのである。これは、単に死んだとするよりは、愛の終りの辛さに堪える姿を描くことによって、永遠に待ち続ける果てしなき情念を表現しようとした試みではなかったろうか。有常娘は、永遠に「人待つ女」でありつづけるわけであろう。ともあれ、有常娘の恋は、「つゝいづゝの場所」において美しく始まり、「つゝいづゝの場所」において悲劇的に終ったことを、『冷泉抄』は描いているのである。

(7) 異なる物語化の方向

以上、『冷泉抄』に描かれる有常娘の一代記を通して、業平とかかわり合って生きたその女人像を辿ってみた。みてきたように、それは『伊勢物語』の解釈の方法としての、新たな物語化といえるものであった。中世の注釈の方法は、一篇一篇の物語の解釈を、この新たな物語化の方向と相互に媒介させるかたちで施してゆくというところに大きな特色があった。従って、新たな物語化の方向といっても、それは注釈の方法と深く結びついているわけであって、あくまでも注釈が主であるために、新たな物語化ということがそれ自体で自立するものではなかった。それゆえ、新たな物語化の中にすべての話が整合的に集約されるという強い吸引力はもてなかった。そこにはこれまで追跡してきた有常娘の一代記とは必ずしも整合的ではない、いわば異なる物語化とも言うべき方向が同じ注釈書の中で許されていた。ここではそのような方向の注釈について触れておこう。

その異なる物語化の方向に支えられた注釈とは、十九段において、

相しるとは、有常が娘を阿子とて染殿后御内に行て仕るを、業平、彼女に忍び〳〵通ひけるをいふなり。

とあることと、三十九段の注釈において、

女車に相のりてとは、有常が娘と同車したるをいふ也。

とあることから察せられる有常娘の京への出仕説をさす。つまり、十九段の注釈のこの引用文に従う限り、有常娘は、常時「春日の里」の父邸にとどまって業平の来訪を待ち続ける立場ではなくなり、京の染殿后邸に女房として出仕したことになるのである。なお、三十九段の注釈に見える「女車」も宮仕えする女房の車を意味するのだろう。それに加え、この十九段の注には、

山の風とは王也。王をば風と云。(中略)されば、我がゐる山とは、わがゐる内裏の王の通ひ給ふ女のなゝれば、よそにのみ見るといふなり。是は、彼女に、光孝天皇のいまだ親王にての時、通はせ給ひしにおそれて通はずといふなり。

とあり、彼女に「いまだ親王にての時」の光孝天皇という別の男が通ったとするのである。これは、三年間も孤閨を守り業平の帰りを待ち続けたあげく、あまりにも長い孤閨の寂しさにくずおれ、新しい夫を迎え入れざるを得なかったとする

十七段や二十四段の注釈における貞女のイメージとは大きく異なっている。この十九段の注釈によれば、

男宮仕しける女のかたとは、業平染殿后につかふまつる也。

と、業平も有常娘と同じく染殿后に仕えていたとし、本文の「同じところ」を前もって説明するが、このように身近に暮らしながらも有常娘が別の男を迎え入れたとすることも、遠く京へ去った夫を奈良で待ち続けたとする十七段・二十四段の解釈とは対照的である。この十九段の本文の末尾には、この女をさして「又おとこある人」と称したとある。このような解釈は、むしろ『知顕集』系注釈書の「あだ」なる女に近いものといえるだろう。

こうした異なる物語化の意味するところは、前節まで辿ってきたような有常娘の一代記とどのようにかかわるのか、これだけでは解するすべがないが、その筋を揺るがすまでに重要な意味を持つところではあるまい。前にも触れたような、『冷泉抄』の随所に散見される内容に於ける矛盾性の枠内に入れて考えておいて差し支えなかろう。

(三)『伊勢源氏十二番女合』における有常娘

前にも触れた通り、片桐洋一氏の「鎌倉時代勢語注釈書の影響」において「冷泉家流古注の影響がまことに著しいものがある」と指摘された『伊勢源氏十二番女合』は、『伊勢物語』と『源氏物語』からそれぞれ目ぼしい女十二人を選び出し、見合った二人ずつをつがわせて勝負の判を論じたものである。その第三番に、有常娘が右の紫上とつがう相手として左に据えられている。判定はさすがに右の紫上の勝とされているが、紫上と組み合わされて優劣を論じられただけでも有常娘は高く評価されていたと見てよかろう。

ここに有常娘に対する判詞を引用すると次のようである。

左、中将の父の親王、紀有常家など、遠からぬ程なれば、おとこも女もいわけなきまゝに、うちいざなひなどしてあそびけるが、春秋の花もみぢにつけても、いろふかきさまに、ゆくすゑかけてちぎりかはしけるに、もろともにおとなしうなりてのよは、女のおやいにしさまにもゆるう心ども侍らぬを、はゝなん心あるさまに、けしきばむおり〳〵もありけるにや、さてよめる、

みよしのゝたのもの雁もひたぶるにきみがかたにぞよるとなくなる

おとこよろこびてかへし、

我ためによるとなくなるみよしの、たのものかりをいつかわすれん
いかなりける折にか、おんな、
あま雲のよそにも人のなり行かさすがにめにはみゆるものから
おとこ返し、
あま雲のよそにのみしてふることは我ゐる山のかぜはやみなり
と侍るは、又おとこある人とかけり。かゝればにや人のくに、、人もとめてまかりかよひけるに、女もはたおなじこゝろに、いでたちやりなどすめれば、おとこいぶかしうおもひけるが、又いぬるかほして、もの、くまに〇ずみみければいとようけさうじて、夜ふくるまでことかきならし、うらみくひて、ぬとて、
風吹けば興津しらなみたつた山よはにや君がひとりこゆらん
此君ぞおとこのいまはの時にもさきだちてこそやみぢのひかりにもと打たのまれ侍るに、すてはて給てんやと嘆ければ、おとこ、
しるやさは我にちぎれる世の人のくらきにゆかぬたよりありとは
さもゆへありがほなりや。[20]
（傍線筆者）

この内容を見ると、書き出しは『伊勢物語』二十三段に拠っており、以下、十段、十九段に基づき、最後に再び二十三段に拠って締めくくられている。なお、冒頭に、「中将の父の親王、紀有常家など、遠からぬ程なれば、おとこも女もいわけなきまゝに、うちいざなひなどしてあそびける」とあるから、二十三・十・十九段の各章段を業平と有常娘二人の話として綴っていることが明らかである。これらの章段を、同じく業平・有常娘の話とする注釈書は『冷泉抄』のみであることは、先学によって既に指摘されたところであるが、これによっても『伊勢源氏十二番女合』が『冷泉抄』の解釈に従って作られたことが窺える。

しかし、この引用文の傍線部「うらみくひて」は、二十三段の『冷泉抄』には直接には見えない解釈である。しかもこの解釈は、中世の女人像としての有常娘が造形される上で重要な解釈であって、そのことは謡曲『井筒』のシテの人物像と深く結び付いていることからも窺えるのだが、それについてはあとで触れることにする。それからすれば、『伊勢源氏十二番女合』が単にそのまま『冷泉抄』の読みに従っているのではなく、むしろそのさらなる解釈を通して、新たなる物語化へという志向性が認められるのである。『冷泉抄』の注釈においては、三年間も帰ってこない業平を有常娘が「久敷

こぬとうらむる」（十七段）ことや、三年間もの孤閨生活にもかかわらず業平が別の女に通ったことを有常娘が「無本意」に思った（二十四段）とあった。このような有常娘像が、これまで辿ってきた新たな物語化を支える『伊勢物語』本文の「女」を貫いてゆくとすれば、当然二十三段の「女」にも及ぶことになる。『伊勢源氏十二番女合』の有常娘像がまさにそうであった。ここには十七段や二十四段に見えた有常娘の「うらみ」を、二十三段の「風吹けば」の歌を詠む彼女の心情にまでおし及ぼしていることが窺えるのである。『冷泉抄』の二十三段の注においては、彼女の心の奥底はどうであれ、少なくとも表面的には、「河内の国へ行をあしと思へる気ざし」がなかったとしていた。ところがこの『伊勢源氏十二番女合』においては、業平が別の女を求めて行ったことを「うらみ」、さらにそのように男を別の女へ通わせた自らをも呵責して（「くひて」）、「夜ふくるまでことかきならし」、「風吹けば」の歌を詠んだとしているのである。この『伊勢源氏十二番女合』の有常娘の「うらみくひ」る心情に拠る限り、夜が更けるまで琴をかき鳴らしたのは、そうした「うらみくひ」る心情を抑え鎮めるためのしぐさと見るしかなかろう。こうして『伊勢源氏十二番女合』における「風吹けば」の歌は、男の仕打ちに対する恨みと嫉妬を吐露した歌となるのである。以上のような『冷泉抄』や『伊勢源氏十二番女合』の解釈は、二十三段本文の「風吹けば」の物語において、高安の女へ夫を通わせた時の「女」の心の奥底には、夫の心変わりを「無本意」に思い、さらには恨めしく思ったところがあったと見ることを可能ならしめるところである。つまり、「風吹けば」の歌を詠んだ彼女の心情には、別の女へ向かう夫への恨みが秘められていたと見てもよいということになろう。

なお、この「風吹けば」の歌に続く、

此君ぞおとこのいまはの時にもさきだちてこそやみぢのひかりにもと打たのまれ侍るに、すてはて給てんやと歎ければ、おとこ、

しるやさは我にちぎれる世の人のくらきにゆかぬたよりありとは

さもゆへありがほなりや。

は、『伊勢物語』二十三段に基づいて新たに加えられた独自異文と見られるが、「おとこのいまはの時にもさきだちてこそやみぢのひかりにもと打たのまれ侍るに、すてはて給てんや」（男が、（私の）死際にも（私の）先に立って（導いてくれて、私の）闇路の光にもなってほしいと、（男を）お頼りしていましたのに、お捨てなさってしまうのですか）と、有常娘が嘆いたとするところには、「風吹けば」の歌を詠んだ有常娘の心情の敷延説明として、男に救済を期待しながらも救済されぬことへの彼女の嘆きが表現されていると考えられる。つまり、歌の「…たつた山よはにや君がひとりこゆらん」

には、死際までも「闇路の光」となって私を導いてくれることを望んでいたほどにお頼みにしていたあなたが、別の女の許に通おうとして、私を離れて一人で「たつた山」を越えて行くのでしょうか、といった有常娘の嫉妬心こもった嘆きがこめられたと、ここには説明されているのである。この「すてはて給てんや」にこめられる嘆きは、前文の「夜ふくるまでことかきならし」て抑えようと努めた「うらみ」そのものの吐露と言える。要するに、この「うらみ」とは「男」に救済を求めて救済されぬ「女」の恨みなのである。その背後には、業深き女、罪深き女という中世的な自覚から、女であるゆえの罪業によって死後の不安におびえねばならぬ女の宿世を「男」によって救済されることを望んだとする中世的な解釈があることが認められよう。

こうした考え方を裏付けるのが、贈答歌形式として「風吹けば」の歌の返歌とされる「しるやさは」の歌である。訳すれば、「それでは、おわかりなのですね。私と結ばれる世の女が暗い闇路に（明りもなく）辿ることをしないですむ導き手がいるということをば」、となろう。つまり「我にちぎれる」世の「女」は救済される、という意味の歌を業平が返したということになる。

契りを結ぶことによる救済に関しては、書陵部本『知顕集』に「男女和合の道」として著しく説かれているが、その「序詞言」において、

・このみちは胎卵二諦の和合の法とて、よくならひ、よくさとりぬれば、即身成仏のくらひにのぼるべき行（なる）
・女にちぎりをむすびて往生の縁となるべし、

等とあるところにその思想は見えていよう。ここで「胎卵二諦の和合の法」とあることから、中世鎌倉期に流行したとされる真言立川流[21]の影響を窺わせるのだが、『知顕集』に見えるこうした考え方が『伊勢源氏十二番女合』にも影響していたことは否めないだろう。

ともあれ、『伊勢源氏十二番女合』における有常娘は、業平が別の女の許に通うようになったことによって救済への道を断たれ、その絶望の「恨み」を、「風吹けば」の歌に載せて吐露する人物像として描かれているのである。ここには、男が別の女のもとへ通うことを恨むといった王朝的な解釈をとる『冷泉抄』に対して、救われぬことを恨むといった中世的な解釈が行なわれ、「恨み」の質的転換が見受けられる。なお、ここで見逃せないのは、紫上とつがう相手として据えられて優劣を論じられるほどの貞女が、自らの感情を抑えきれず、夫への「うらみ」を露見したとする点である。すなわ

ち、『伊勢源氏十二番女合』には、男の変心による女の心の揺らぎに焦点があてられ、これほどの貞女でさえ、心の内奥にうごめく嫉妬心を抑えきれず、男への「うらみ」を吐かざるを得なかったという、業深く罪深い存在という中世的な解釈に基づいた有常娘像が編まれているのである。

四、謡曲『井筒』の本説―結びにかえて―

世阿弥は、『三道』（能作書条々）において、「本説の種をよくよく案得して」（能の拠り所となる素材をよくよく会得して）能作を行なうべきことを語っている。これは、本説を重視する世阿弥の態度を窺わせるところであり、また『申楽談儀』などにも同じような態度で臨んでいるのが見られる。よって我々は、より精密に本説を確かめねばなるまい。

従来、『井筒』の主な本説が『冷泉抄』であろうということは既に先学によって指摘されたところである。[22]伊藤正義氏も、『冷泉抄』における「『伊勢物語』の右各段をつないだ紀有常の娘の物語」に『井筒』の本説を求めている。しかし、『井筒』構想の直接の拠り所、即ち「作者の内にあって凝集され構想されて作品化するに至った本説」（伊藤正義氏、前掲注（6）の論文）という場合、『冷泉抄』のしかるべき章段の注釈のつなぎ合わせではなく、むしろ、本稿で追跡したところの中世における新たな物語化の方向にこそ『井筒』の本説があると見るべきではなかろうか。そして『冷泉抄』やそれを受容して編まれた『伊勢源氏十二番女合』に描かれる有常娘像には、中世的な解釈にもとづいた業深く罪深い女人像が読みとれるのである。有常娘は、「人待つ女」として、ひたすらに業平の訪れを待つ貞女であった。しかし、それにもかかわらず、女人の業ゆえに、業平の色好みに対してどうしようもなく「うらみ」を抱かざるをえない女人でもあった。本説がこの中世における新たな物語化の中に認められるとすれば、このような女人像こそ謡曲『井筒』のシテの人物像に投影されているのではないだろうか。それゆえに世阿弥が謡曲『井筒』の中に描こうとしたシテの実像に迫るためには、こうした女人像を比較の対象とした作品の読みを行なうべきではなかろうか。『申楽談儀』において、世阿弥が「井筒、上花也」といった最高の自賛を次男の元能に言い聞かせたのも、単に美化した至純な恋心だけでなく、前述のようなより膨らみのある中世的な女人像を作品の中に巧みに組み込めたことからの満足感の現われとは見られないだろうか。こうした考えの上で、謡曲『井筒』に描かれているシテの人物像を捉えていくことは、稿者がこれからの課題としているところでもある。

注

(1) 岩波思想大系『世阿弥禅竹』二八六頁。
(2) 例えば、表章氏も「妙花風の可能性を暗示した評価で寵深花風よりも高い評価であろう」と同前書の頭注に述べている。
(3) 同前書、二八八頁。
(4) 同前書、二八九頁。
(5) 西村聡「「人待つ女」の「今」と「昔」—能『井筒』論」(『皇学館大学紀要』一八、昭和五五・一)
(6) 伊藤正義「謡曲と伊勢物語の秘伝—「井筒」の場合を中心として—」(「日本文学研究資料叢書」『謡曲・狂言』有精堂、昭和五六、所収。)
(7) 中村格「室町末期の女能—『井筒』の場合—」(『東京学芸大学紀要』第二五集、昭和四九)。「『井筒』の主題と「幽玄」」(『観世』昭和五一・四、前掲論文の一部を再収録)
(8) 香西精「『井筒』—作者と本説」(『観世』昭和三八・九)
(9) 片桐洋一、『伊勢物語の研究[資料篇]』(明治書院、昭和四四)所収。氏によれば、『冷泉家流伊勢物語抄』とは、「原題の『伊勢物語抄』があまりにも普通名詞的であることを慮って」、片桐氏が私に付した仮題。(同氏『伊勢物語の研究[研究篇]』所収「冷泉家流伊勢物語古注をめぐって」、五三三頁参照。)謡曲『井筒』が『冷泉抄』によっていることは、伊藤正義氏の前掲論文「謡曲と伊勢物語の秘伝」において明らかにされた。
(10) 竹本幹夫「愛の追憶—『井筒』『杜若』など」(『国文学』昭和五八・七)
(11) 本文引用は、古典大系本『謡曲集』上に拠る。以下同じ。
(12) 「鎌倉時代勢語注釈書の影響」(前掲『伊勢物語の研究[研究篇]』所収)六三四頁参照。片桐氏によれば、『伊勢源氏十二番女合』は、鎌倉時代の作と推定されている。
(13) 『知顕集』には、書陵部本、島原文庫本、群書類従本などがあるが、島原文庫本と群書類従本はほぼ同一文であり、ここでは前二者を考察の対象とする。
(14) 本文引用は、前掲『伊勢物語の研究[資料篇]』に拠る。以下同じ。
(15) 前掲注(13)の論文、六一七頁。
(16) 堀口康夫『猿楽能の研究』桜楓社、昭和六三、所収。

(17)「伊勢物語古註考」(『国語国文』昭和三九・四)一六頁。『冷泉抄』の注釈態度に関しては、この論文に詳しい。
(18)底本には「…ねに」とあるが、「ね」の字が「為」の誤写と見られ、さらに文脈の繋がりを考えて、「…為に」と直した。
(19)底本には「…義。有常…」とあるが、意味上の繋がりを考えて「有」の次に句読点を施した。
(20)本文引用は、前掲『伊勢物語の研究[資料篇]』に拠る。
(21)村岡空「性と仏教—真言立川流の新資料をめぐって—」(『歴史公論』第五二号、昭和五五・三)参照。
(22)古典集成本『謡曲集』上、「各曲解題」四〇四頁。ただし、『冷泉抄』を解釈した筈の氏のこの「解題」の中には、「三年目の夜、業平を追って、追い続けて息絶える。」と、『冷泉抄』から有常娘の死を読みとるところが見えるが、これは「そこにていたづらに成にけりとは、死たるには非ず。」とある『冷泉抄』の注釈を見逃した読みと言えよう。他に西村聡氏や竹本幹夫氏の前掲論文にも同じような読みが見受けられ、ここで指摘しておく。